週刊東洋経済
2016 11/26

CONTENTS

表紙から

馬券の売り上げが回復基調の競馬。藤田菜七子騎手はJRAで16年ぶりの女性騎手として人気だ。

ロイター/アフロ
YUTAKA/アフロスポーツ

50 【第1特集】

経営者も引き付ける 競馬の魔力

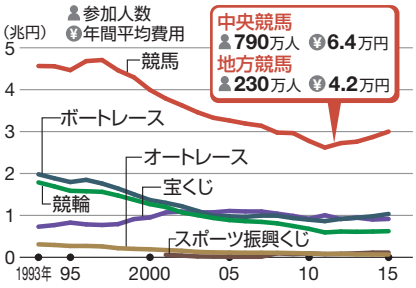
52 Ⅰ 競馬はなぜ人々を虜にするのか
人気を取り戻した大人の知的ゲーム

54 図解 企業経営者もズラリ！ 華麗なる馬主群像
56 INTERVIEW | 堀 紘一●ドリームインキュベータ会長
57 「競馬も経営も本質は同じだ」 朝倉祐介●元ミクシィ社長
58 競馬はなぜ「ブラッドスポーツ」と呼ばれるのか
66 エコノミストが語る 競馬の正しい楽しみ方 | 双日総合研究所チーフエコノミスト●吉崎達彦 / 経済評論家●山崎 元 / 投資銀行家●ぐっちーさん
69 一口馬主は儲かるか
70 データで見る競馬の損得 1番人気の勝率は3割
71 一獲千金狙い!? 人気の券種は3連単
72 時代を彩った名馬たち
75 みんな『ダビスタ』で育った
76 賭けなくても楽しめる 大変身した東京の競馬場
79 エースアナが語る名実況の裏側

80 Ⅱ 知られざる競馬界の深層
高まるネット依存 JRAの直面する課題

83 国家公務員より3割高給 好待遇のJRA職員
84 日本競馬を席巻する社台グループの実像
87 新聞記者が騎乗仲介 競馬界の不可思議
88 転落からの復活劇 天才武豊の真実
90 経営危機から一変 息を吹き返す地方競馬

■ 競馬は回復基調
—ギャンブルの市場規模— (→P53)



吉崎達彦 66
双日総研チーフエコノミスト
「経済予測の精度を上げる勉強になる」

山崎 元 66
経済評論家
「競馬は投資ではなく教養娯楽費と考える」

ぐっちーさん 66
投資銀行家
「最高のドラマが楽しめて3分で結果がわかる」

緊急特集

26 危うし！トランプノミクス

世界をあっと驚かせた米国の大統領選挙。
当選直後の懸念を吹き飛ばすように現在は株高に沸くが、トランプノミクスの中身はまだ見えない。

30 各界の識者に聞く トランプ大統領はどう動く？
小林栄三●日本貿易会会長
長島昭久●衆議院議員（民進党）
シーラ・スミス●米外交問題評議会シニアフェロー
久保文明●東京大学教授
中島厚志●経済産業研究所理事長
渡辺 靖●慶応義塾大学教授
小野 亮●みずほ総合研究所主席エコノミスト

36 米国が壊れていく トランプ支持の真相
38 公約か、現実路線か トランプのジレンマ
40 トランプ外交の行方
43 「民主党よりマシ」北朝鮮の本心
44 トランプ大統領を生んだ〝ヒルビリー〟とは（白人労働者階級）
46 安倍政権 次の一手

ニュース最前線

緊急インタビュー

ジョセフ・E・スティグリッツ

18 「トランプ危機に備え 年内の利上げも良案」

20 スマホゲームの〝黄昏〟 見えない次の稼ぎ頭

22 建設バブルに〝変調〟 大手集中で二極化も

23 絶好調の半導体装置 日中台で上昇気流

「米国経済がトラブルに陥るリスクはかなり高い」。経済学の権威は警鐘を鳴らす

11 | 経済を見る眼 | トランプショックの経済学／小峰隆夫
13 | この人に聞く | 村尾 修●ジーエス・ユアサ コーポレーション社長 | ニッチな製品も押さえる
25 | 少数異見 | またも希望的観測が噴出 トランプリスクを直視せよ

経済を見る眼
小峰隆夫

この人に聞く
ジーエス・ユアサ コーポレーション社長
村尾 修

ニュース戦記
星 浩

知の技法
佐藤 優

92 | ニュース戦記 | トランプの米国はどこに向かうか／星 浩
94 | 知の技法 | トランプ当選が与える日本への2つの影響／佐藤 優
96 | 中国動態 | 1日で1.9兆円爆買い 独身の日セールの岐路／田中信彦
98 | グローバルアイ | 唯一の超大国の座を降りる米国とアジア／ギャレス・エヴァンス ほか
100 | フォーカス政治 | 民主主義政治の劣化が世界的に拡大している／山口二郎
106 | マクロウォッチ | イエレン議長の「高圧経済」論 トランプ相場が吹き飛ばすか
108 | ゴルフざんまい | 史上初、アマチュアとして優勝した畑岡奈紗
112 | ブックス&トレンズ | 『国家とハイエナ』を書いた黒木 亮氏に聞く ほか
121 | Readers & Editors | 読者の手紙、編集部から
122 | 生涯現役の人生学 | 先例を破る草莽パワー／童門冬二

中国動態
田中信彦

グローバルアイ
ギャレス・エヴァンス

ブックス&トレンズ
『国家とハイエナ』
黒木 亮

生涯現役の人生学
童門冬二

11月19日号　訂正情報

33ページ、「頼りにするメディアは何ですか？」のグラフ注記で、「回答者全員（15～59歳）の平均がゼロになるような指標値を表している」とあるのは、正しくは「回答者全員（15～69歳）の平均がゼロになるような指標値を表している。60代の指標値は割愛」です。

PR
5 ビジネスアスペクト　岩谷産業／暮らしを支えるLPガス　未来を拓く水素エネルギー
48 内閣府　「企業版ふるさと納税」がスタート
61 ビジネスコア　竹中工務店／竹中工務店が最先端の技術力を結集し『脱炭素モデルタウン』に挑む
93 厚生労働省　知らなかったでは済まないパワハラのリスク
102 広告特集　電力自由化による日本の活性化、競争力強化に期待。
110 中小企業の生き残り戦略
123 BUSINESS WAVE collect　サンライズ・アカウンティング・インターナショナル

図表作成：小堺賢吾

本誌の記事は「日経テレコン」「G-Search」「ELNET」「FACTIVA」等のデータベースに収録されており、フリーキーワードで検索、購入できます。

各界の識者に聞く トランプ大統領はどう動く？

トランプ新大統領は就任後どんな政策を打ち出すのか。選挙期間中の過激な発言から、政財界では不安視する声が大きい。「同じ実業家として信頼している」と話すのは日本貿易会の小林栄三会長だ。

実業家であるトランプ氏がリーダーに決まったという期待感が込められて、足元が株高・円安になっているのは面白い動きだ。

ただ、世界経済全体の流れは大きくは変わっていない。何となく悪くはないけどすっきりしないというのが現状で、少なくとも2016年の世界経済の成長率は3%前後だろう。中長期的には、来年の就任以降、トランプ新大統領が実際にどんな政策を取るかにかかってくる。

彼がよく言う「deal」という表現に代表されるように、トランプ氏はすべてのことについてそれが米国のためになるか、ならないのかという議論をするだろう。

とはいえトランプ氏は11月8日に当選してから、現実路線に舵を切りだしている。移民の問題にしても、まだメキシコとの国境にフェンスを作ると発言しているが、同時に周りを見ながら政策を作ろうとしている。好き放題、飛んではねての、あの選挙のときのイメージはもうないと思う。

実業家としてのトランプ氏は歓迎する

もちろん、まだまだ新大統領からのアウトプットは少ないし、就任時にどんな話をするかわからない。紆余曲折があるかもわからないが、ウィン・ウィンの関係を築けるのではないか。何しろ彼は実業家。実業界の人間というのは夢だけでは食えないから、間違いなく現実に立脚した施策をやっていく。実業界としては、トランプ氏を歓迎する。

日本貿易会が懸念しているのはTPP（環太平洋経済連携協定）の行方だ。日本は明治以来、貿易立国で成り立ってきた。国の発展にはTPPが必要という思いが非常に強い。商社をはじめ産業界にとっていちばんいいのは、人・モノ・カネ・情報が自由に行き来する世界だ。それが全部遮断されてしまうと、一つひとつのビジネスの規模が小さくなり、相乗効果を生み出すのは大変だ。

今は（TPPからの離脱を主張する）トランプ氏がどう動くかわからない状況だが、米国にとってTPPが本当にマイナスか、プラスか、いずれ理解してくれると思う。NAFTA（北米自由貿易協定）にしても、オバマ大統領は選挙期間中には「見直す」と発言したが、結局は見直されなかった。

今回の大統領選挙では感覚的に「モノづくりの仕事が奪われた」などマイナスの側面ばかりが強調されたが、本当にそれがマジョリティの意見か、共和党や官僚のプロにインプットしていただいて冷静にお考えいただきたい。

そもそも日本がTPPの検討を開始したのは、米国の誘いがあったから。日本では知られていなかった09年当時、TPPのことをよくジョン・ルース駐日大使に説明してもらったものだ。それからこれだけの時間をかけて12カ国が大筋合意に至った。「さあこれから」というときに、すべてが崩れるとなると日本もいろいろ考えないといけない。

政・官だけでなく民もいろんな場で話したい。われわれには貿易立国を引っ張ってきた自負がある。保護主義にならないことが世界に必ずメリットをもたらすと思う。

米国抜きでのTPPや中国主導のRCEP（東アジア地域包括的経済連携）を結ぶ選択肢は、実効性に疑問がある。TPPで基本合意した12カ国では、日本の倍以上ある米国の経済が圧倒的に大きい。米国が入らなければ画竜点睛を欠くし、それは現在考えられない。

日本貿易会会長
小林栄三
こばやし・えいぞう●1949年福井県生まれ。72年、伊藤忠商事入社。情報産業畑を歩み2004年社長、10年から会長。14年から日本貿易会会長。

撮影：尾形文繁

米国抜きでのTPPは到底考えられない

トランプ氏側近とされるマイケル・フリン元陸軍中将と10月に面会し、今後のトランプ外交・安全保障政策の行く末を占うのが、外交・防衛通として知られる民進党の長島昭久衆議院議員だ。

選挙結果は衝撃的だったが、その後の言動を見ると、なかなかの人だなという印象だ。逆に、トランプ氏の言葉を信じて投票した人が、トランプ氏の現実路線への転換を許容するのか心配になる。何を切って何を残すべきか。ビジネスマンとして、彼が培ってきたすべてを今フル回転させているのだと思う。

トランプ氏が自らの政策を修正したとき、トランプ氏を押し上げたうねりとどこまで整合がとれるか。うまく統治していくには、それくらい変身しないといけないかもしれない。現実路線にうまく転換できれば2年後の中間選挙、4年後の再選も見えてくる。

今年訪米した際に聞いた、トランプ氏をよく知るある専門家の評価は、クリントン氏はストラテジック（戦略的）。対するトランプ氏はトランザクショナル（取引的）だと。トランプ氏はまさにディーラーで、それが外交に転用されると大変なことになる。

内政を重視して外交はきちんとした人に任せるならいいが、日本にとって悪いシナリオは空白ができること。外交は中国やロシアに任せて放っておけとか、同盟関係を無視して、たとえば中国からの輸出を抑える代わりに、南シナ海は好きなようにしていいというような取引をされるのが怖い。トランプ氏が外交・安全保障についてどこまで主導権を握る意思があるかわからないが、外交や安全保障を自分で手掛けるほど関心があるとは思えない。その点オバマ氏と似ているかもしれない。

フリン元中将は日米同盟再構築を要求

11月に出た外交専門誌に、トランプ氏の外交アドバイザー二人の書いた論文が載っている。私もすぐに読んだが、「ピース・スルー・ストレングス」、つまり「力による平和」という言葉がタイトルになっている。これは誰が見てもレーガン時代の言葉で、トランプ氏自身もスタイルとしてはレーガン氏のようなことをやりたいと思っているのではないか。力による平和という言葉は、いわば現代共和党の原点だ。

レーガン氏は家族の価値だとか、古きよき米国の倫理的部分をすごく強調した。トランプ氏はそういうものを全部ぶったぎって、今さらレーガンかよ、となるかもしれない。だから、トランプ氏がレーガン氏のようになるかはわからない。

前述の論文はオバマ氏とクリントン氏のやったピボットやリバランスは表面的なもので、実態を伴っていないと指摘している。今の海軍力は第1次世界大戦以来最低、今の陸軍力は第2次世界大戦直前以来で最低、今の空軍力は創設以来、つまり戦後最低、そして、今の即応体制のレベルはここ20年で最低だといっている。それを実態の伴ったものにするという内容だ。

あちこち介入されるのも困るが、力による均衡の体制を米国が継続してくれるなら中国の台頭や北朝鮮、ロシアの動きも牽制できる。同盟国としては願ったりかなったりだ。

10月に来日したマイケル・フリン元陸軍中将も同じ路線だ。話題の一つは駐留経費の100%負担や核武装のこと。これは選挙キャンペーンの話であり心配するなと。ただしポジティブな意味で、同盟関係をリニューアルしたいと言っていた。

もう一つはロシア。日露関係が進展する可能性はあるが、オバマ政権は何度か懸念を表明した。フリン氏は日露関係の改善はいいことだが、プーチン氏は一筋縄でいく男ではない、と。三つ目がTPPの話で、トランプ氏はマルチ（多国間）の交渉は信頼していない、と話していた。

衆議院議員（民進党）
長島昭久
ながしま・あきひさ●1962年生まれ。慶応大学大学院修了、ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究大学院修了。

撮影：今井康一

「力による平和」を追求しレーガン流外交の復活か

経営者も引き付ける 競馬の魔力

経営者にもファンが多い競馬。ただのギャンブルと見られがちだが、知れば知るほどのめり込む世界がある。その奥深さに迫った。

本誌：福井 純、猪澤顕明、鈴木良英、中島順一郎
デザイン：熊谷直美　進行管理：宮澤由美

ＧＩジャパンカップを控えた東京競馬場は熱気を帯びている

撮影：今井康一

時代を彩った名馬たち

ファンでなくとも知っておきたい最強馬たちのストーリー。

ターフライター●平松さとし

わが巨人軍は永久に不滅です――。長嶋茂雄が名ぜりふを残してバットを置いた1974年。1頭の競走馬が社会的ブームを巻き起こした。その名はハイセイコー。オールドファンなら誰もが耳にしたことのある馬名だろう。

当時は、競馬場といえば中高年の男性が馬券を握り締めて闊歩していた時代。汚い野次は飛んでも、黄色い声援など皆無だった。そんな時代でも、ハイセイコーが「アイドルホース」と呼ばれたのには理由がある。

日本の競馬は施行団体によって二つに分けられる。一つは土日を中心に開催され、賞金が高く、馬券の売り上げも多い中央競馬（JRA）。もう一つは主に平日に開催され、賞金も売り上げも、そして注目度も中央競馬に劣る地方競馬だ。大ざっぱな言い方をすれば、華やかな表舞台が中央競馬で、ひっそりとした裏舞台が地方競馬になる。といっても地方競馬の馬が中央競馬に劣っているというわけではない。ハイセイコーはそれを証明した1頭であり、絶大なる人気のゆえんはそこにある。

72年に地方競馬の一つ、大井競馬場でデビューしたハイセイコーは、破竹の勢いで6連勝を飾り、翌年に勇躍して中央競馬に殴り込んだ。

それまでは地方競馬でいくらよい成績を残していても、中央に来るとはじき返されてしまう馬が多かった。賞金の高い中央競馬に良馬が集まるのは必然だからだ。

ところがハイセイコーは中央に移籍した後も結果を残した。連戦連勝し、3冠レースの一つである皐月賞も制覇する。地方競馬上がりの馬が希代の名馬への階段を着実に上っていった。

とはいえ彼が絶大な支持を得ることができたのは、かくも強かったからではない。地方時代から10戦全勝を果たしたハイセイコーは73年5月、サラブレッドの頂点決定戦である日本ダービーに挑んだ。ハイセイコーは1番人気となり、単勝の支持率66・6%。これは当時の新記録だ。さらに中央競馬史上で最多となる16万7367人が東京競馬場に詰めかけるほどだった。

このレースでハイセイコーは生涯初めての敗戦を喫する。レースに勝利したのはタケホープ。レース前に、同馬の騎手・嶋田功が、「ハイセイコーの脚が4本なら、タケホープの脚も4本」と語ったのは有名だ。3冠レースの最後、11月の菊花賞で経った83年、新たなアイドルホースが登場した。ミスターシービーだ。

同馬の人気はハイセイコーとは異なるものだった。父馬は、天馬と呼ばれ皐月賞や有馬記念といった大レースを制したトウショウボーイ。良馬の血統を引き継ぎ、ミスターシービーは3冠馬として人気を得た。

3冠馬とは、皐月賞と日本ダービー、菊花賞のGI3レースを制した馬に与えられる称号だ。この三つのレースはそれぞれが違う競馬場、違う距離で、そして異なる季節に行われる。さらに3歳馬しか出走できないこともあり、すべてで勝利するのは至難とされている。

64年にシンザンが史上2頭目の3冠馬になって以来、長らく途絶えていた歴史の扉を久しぶりに開けたのがミスターシービーだった。それも彼の競馬は、つねに最後方から追い込む形。その豪快な走りぶりがファンを熱狂させた。

だが、その強さに比肩する馬がすぐに現れた。ミスターシービーの翌年に3冠馬となったシンボリルドルフだ。いつでも抜け出せる好位での競馬を得意とし、ゴール前で正確無比に前をとらえ、先頭でゴールする。83年のデビューから84年の菊花賞まで8戦8勝と、史上初めて無敗で3冠までを制していた。

両3冠馬は、シンボリルドルフが3冠を達成した2週間後のジャパンカップでさっそく対決した。4歳となり天皇賞（秋）を制覇していたミスターシービーと、無敗のシンボリルドルフ。2頭は牽制し合ったことで、伏兵のカツラギエースの逃げ切りを許してしまったが、先着したのは年下のシンボリルドルフだった。

続く12月の有馬記念で、カツラギエースを含めた3頭が再び相まみえた。このとき、シンボリルドルフの騎手であった岡部幸雄は、「最強馬が同じ相手に2度負けるわけにはいかない」と気合十分に語り、調教師の野平祐二からは「借りを返してこい」と言って送り出された。そして、追い込もうとするミスターシービーを突き放し、逃げ粘るカツラギエースもかわし先頭でゴール板前を駆け抜けた。

翌春の天皇賞でも、5着に沈んだミスターシービーを尻目に、シンボリルドルフは1着でゴール。その競馬ぶりから人気では劣らなかったミスターシービーを三たび退け、〝皇帝〟シンボリルドルフは史上最強馬の地位を揺るぎないものにした。

2頭の引退後まもなく88年、社会現象となった芦毛の怪物が登場する。オグリキャップだ。ハイセイコーと同様に、地方競馬出身で無類の

ハイセイコー

1970〜2000

KPS

現役期間	1972〜1975年
生涯成績	22戦13勝
本賞金	1.9億円
GIタイトル	皐月賞／宝塚記念

元祖アイドルホース

競馬ブームの立役者は負けても一層愛された

シンボリルドルフ

1981〜2011

報知新聞／アフロ

現役期間	1983〜1986年
生涯成績	16戦13勝
本賞金	6.6億円
GIタイトル	皐月賞／日本ダービー／菊花賞／有馬記念（84、85年）／天皇賞（春）／ジャパンカップ

皇帝

史上唯一の3冠馬対決を制し最強馬の地位を確立

オグリキャップ

1985〜2010

日刊スポーツ／アフロ

現役期間	1987〜1990年
生涯成績	32戦22勝
本賞金	8.8億円
GIタイトル	有馬記念（88、90年）／マイルチャンピオンシップ／安田記念

芦毛の怪物

引退レースでの劇的勝利に競馬ファンは涙した

3冠馬の直接対決が実現 人気で比肩した2巨星